いろやうゑ

へ 5
6540

へ5
6540

[illegible]
[illegible]

台月　　柏葉

[illegible]　柏葉

旅中二句

[illegible]　[illegible]

[illegible]　、

[illegible]　、

[illegible]　、

[illegible]

[illegible]　春湖

[illegible]　、

[illegible]　、

音信

西京東山双林寺前　芭蕉堂良大
大坂今橋二丁目　五木菴潮水
東京深川中佐賀町　築菴春湖
加州金澤博労町　竹橋屋三右エ門
柏葉

010186021857

俊頼の朝臣作ることは[illegible]かならず
[illegible]
[illegible]入りて國人
の[illegible]
[illegible]
いまは[illegible]日数を[illegible]土佐[illegible]

尾陽雲林蓄文庫

[illegible]蔵書

へ5
6540

01018602185 7

[illegible]

雅友の佳句妙境を探るにつきてあまた其
八九年のなかの玉を極て冊子撰出宗匠是
をおもひなしつ家にて集の名そのまゝ
ことや笠やとりの名ある故ありと云爾
己巳季春日　浄川　書記

笠舎集

正月類部

浪ことにうつむ包や初日出　一陽

元朝小坂の神社に詣

古十社初日迎へんけり山　梅雅

時ならぬ晴着の雑煮かな　卓志

何事やうらゝり初りふ度京　青淡

草の戸の春やまたるゝ袴着　枕仙

鶯に吹れて明る里　古沢

二日にも手採まれにや嫁の尻　雪潮

嵩のての式に春浅き嫁の尻　壮山

庭雀の雪に嬉しき春の尻　嵐牛

ふたつ日や雪に風ある世のよき　天老

その日まはしめりけり若菜摘　雪鶯

草花のはしめなりけり若菜摘　流翠

若草を摘出しけり君哉　鹿和

正月とはいひなから十日過　静里

あけて鶯　関中に見ゆる光　披石

達磨焦はしの桜　蝶飛ふ机　呉方

梅が枝にのよ　雪も見月桜花　相林

村家の雲の隠れし正の梅　素陽

雲雀連て秋田に春来梅の花　江春

舩頭か舟洗ふ頃り梅が香　研月

ある旅人の旅送に

梅咲て土器に酒ふ吹しきられ　衛風

鶯て去酒ちる月や梅の主人　九成

野に出て居余気の月と梅　禾圃

梅さく一里を〆つゝき山の春　蓬宇

山かし坊梅の垣や梅の香　三猪

まさしみなから過ぬ柳かれ　萩雅

石ふまぬ居へ出てきて柳かな　峯山

淵ぬきふ掴らう岸の柳かな　素水

黄鳥や眼を心済る寒の霜　一影

こゝ消をふ翁ぬ茶中の蕨哉　亨荘

鶯が藪さきに鳴く濱手の郷　茶之

鶯やしきりが声を句きせ哉　柳屋

黄鳥の晴やちらかけよき木の百　禾明

庭松のうちにて戻るや枯くさら　君逢

海苔舟繁や秋の夕紅葉の御てくれ　元外

花ほちと紅葉の木陰ありて海苔の石　林故

春過ぎて山くらし春や海苔砧　其孫

雨晴て春暁終ら中えをの雨　子住

鶴鳴て春を子もる清や清らの月　眺拳

里山秋猿や芳初しほ　孟交

よ折ほどく乙ぐちて霞や水の音　古心

ゆ世の東風をたて影や手向の鐘　五休

庭はしく法にそ来て走秋の水　三楓

二月之部

如月や梅のうら枯薮雇しき　文昇

桜さん気やはしめて魂の猿を渡く　柏紫

草餅窓阿弥陀の中の十団子　其悠

雑子畔や猿まへる鏡山　旅水

明ぼのや山より下し[illegible]雛子の影　楚巾

[illegible]の[illegible]雛や[illegible]雛子雲雀　芳泉

[illegible]足のぬくさや[illegible]雲雀　文都

麦ふみや[illegible]雲雀の行衛　市猿

[illegible]巣の[illegible]来　尾正

春の雪[illegible]青を[illegible]　古年

[illegible]の岸は[illegible]　巣欣

[illegible]　东園

李[illegible]のきりかれ　李宗

[illegible]桃の[illegible]　赤南

[illegible]桃の花　淵水

三月雛部

[illegible]借りや[illegible]の宿　為山

又[illegible]の[illegible]や[illegible]山　松濤

[illegible]我より[illegible]　宗夢

雨晴やしのはさる蓼の影　世川

氣のはらる庭の垣やしの結　其珠

青空やしを見咲より散る日まて　省我

咲溢て雛のうしつきはらうれ　琴堂

きらくらと帰の垣や野かきり　立意

散迄は文字のうら明り山櫻　桃里

折まらうは何とやしのうり戈　素窗

海棠や浦かるの家をしいん　春泉

馬経やうつしりみ宿の色　大菽

雨晴ゐ去る蛾か經る鄕ゐ那　新雲

流れ来て咲くりの庭や舞迄き　木和

永き日も鈴さし通しけり猫のうた　竹良

若葉のそらもそらつき備り　木甫

跳兵が初あみなくて芋むし穂　弘美

萌しうの鈴か吹る拍つ朝かけし　東蕊

萬きさうれなし安や花ま夜　草尺

四月類部

袷着てかくれもやらぬ衣川　此一

松風に蔵のあける四月哉　柏葉

二度むかふよりの命や杜若　雪朗

あ夢招て替まきて明て杜若　青旗

杜若ちるきい雨の淡行ら　乙彦

わか葉影風のさわぐ隣の上　来芸

雨晴て葉の照まさるや若楓　綺石

西宮にて

桃酒むかふ我宿の志りうなれ　三水

髭にさくら雨も来つる植麦哉　閑芳

青葉くさむや生屋のひきの山　桂放

結つ紅百にむら葉や豆畑　自長

降てまく挿木の釜ひや枝桂　琴哉

明易き高う鳴りけりほとゝきす　寒支

土やつ越中ゟ出の出しまけり　完鶴

降りそゝぐ雨の明けし子規　星坡

峰の月雲に出合ひし時鳥　葭丸

時々なかし帆のうちに聞きけり　素山

筆にゆく高音や降りけり　杉年

梅か枝あやめの時節哉　思楽

降る程はつゝ都や君も出　蔣池

五月類部

朝露や田もせ人に菖蒲の日　景花

結ひてし出来る去変や村の出　二葉

書けと来る降るや明りや軒の端　西伴

今明し梅の花の浮菜哉　文宗

館の庭や池山出河に訓か識　松降

深き降るに人の手に識る清水哉　巴大

幸ひ木の影ぬく野のきよさ哉　士芳

身の雲陰ぬくて蒼嫁し残さら　路沚

孫屋社路

涼しさを志ろき庭のひかり哉　秀阿

六月類部

螢窓の露とも知らぬ夜哉　大夢

螢やいれまくに緑やたゞ無しに　風兮

涼しさの浅茅あまたや宝閣寺　松山

たゞ来きうに来る風涼し窓の元　洒旅

向ふて飛ぶ都や雲のみね　希静

夕顔に枯佛の尺ゆる住居哉　東休堂 莵丘

水草の花いさ紀よし野のうち　班壺

濁りてもいかく流し蓮の花　獨仙

晴りよき空のちりぬ見へかね茅輪哉　一阮

七月雑部

涼しさのたゞ此所や天の川　果燕

浮雲に秋の色あり常盤　家菜也

大文字の陰しや東河原の燈　黎来

尽て後見送るつばくろ行く音の鴨　柏巣

水打て涼しき見つけぬ詩読ぬ秋　方月

秋風や雲あたる軒袖に入る　旭斎

鴫子の迹をはなれて旅の風　頼史

秋は今青き色の蟋蟀の風　杉休

朝の陰や路のほとりに思ひ浮べ　覚三

二三夜はもう秋今有落つる秋　羽海

是あたり秋来ぬ秋に落ち水　嘯江

八月雑部

六日月や夜をあかして虫の極　東流

三日月やかゝるやさしき松象捨　欣尚
おもしろげに鯨屋ちりさする月見ゆ　釣月
人ひとりのみ一きいふす秋の月　亜村
芽栽にも遅き俤なる月夜かれ　和益
少しづつ露ちり尽かぬ芙蓉かれ　照年
栗餅をおち遣八ぬうき花かれ　琴丸
色つやしおちこゝわりぬ番椒　松廬
菊を回く誹する虫や竹の奥　甘海

ゆく水にをりくしらく竹ぞうれ　介居
秋の香は何ぞうき野原うれ　奇峯
かしらにもおもしろき秋の水　一止

九月雑部

菊の影や桶の浮きは浮かり　亜表
峰寺や壺山ふるて筆口和　素庭
陵紹の色もとゝうけ落くの花　松庵

菜の花や鋤子掛の明ケ合　時哉

並木の風のきゝ行草の声　孤立

芦交ハ梅より下に落さらん　杜生

五六日滝より穂のさかりかな　甫立

風流をたしなみしのきりぬ礎哉　蕉維

つまつまり秋ハ何ありけり時　丘大

十月類部

きつくと柿に新紙をはられけり　雪紗

旅宿に実を集めし九月哉　芝桂

拝出して雅に一夜の月見かな　未旅

残るもの陰子をわつかす秋哉　梓丘

榎桐の葉の落き尽くる日和かな　志国

十月の宇都のもみぢや　豆礎　杜水

ちりしや菜もちりて朝の霜　酢雨

木からしや末寿く水底の音　宗彩

冬来てもわけ逢たき落葉かな　言水

大風の風て吉しく散る木の葉　春峰

朝きれ落葉掃けりうり霜　雨琴

風きれ身を細らして枯る尾花かな　乙也

枯菊や何をたよりに飛ぶ虫　逸外

冬の日のさしてや田の山しの動く月　芳草

野は末や小春暮て小松かく　達水

雪護院の色そへて

何処から来る名もきれ小春日和れ　古石

水仙の香やきし流れや敷近　木主

夜は陰に咲てうつろ八重うれ　涼志

麦蒔や葡萄の棚の下伝ひ　等志

洞の船窓植麻させて法名哉　文沖

町ゝ庵てあくるや足跡しこそ独　鳳旋

きく傍やみぎりに出る根数垣　三尓

世のなかに風きる所や秋くれり　如白

曇日より行年乃雲さ大根枯れ　宇山

山深く炭を焼けるけふり哉　柏梨

暑さ抜も行生に却つく後の月　閑出

十一月影部

初雪と地をふまるゝやきのふ今日　坂　住居

初雪や先たゞ白きに里眠り　乙瓢

初雪のゆふりや竹の葉揺り　寄遠

松の・わき峰につもりし白雪　士英

すこくに鶴白の深さや雪の山　不年

陸に晴き雪出深くしかし庵根の雪　子紹

雪にて文も新らしく届くなり　苔今

雪拵し雪車や晨酒の肴口　梅村

墻つゝきその中さに紅葉ぬらち　鉄海

蚊燭火の穂にうつるさかな　竹涯

の波や日に赤き朱欄さきられ　雪濤

霜置て昔を尽くら柿屋根　山士

夕波の寄せていもち秋かな　孫平

埋火の消しぬや部屋ちらち　墅竹

湯若湯玄せしまう錦の枝　五渡

雪の夜は清めに数て新嘗会　素滴

廿日て出る月寒さ根きん里郭　泳芭

十二月影祇

何を鶯に雀の残るらむ　寄雲

人まふ影や月部の雁なけひ　一朗

紫穂を織るてうまやとりぬ　居提

積雪にうもれぬ門のとざされ　佗山

春さかり山のゆふへや鐘の音　茂雅

年内立春

志賀の山の都そうれし今朝の春　英史

鶏も時をつくりけるや家の陣　義兄

有明の月見る志賀里て衣脱り　無岳

紫陽花紫もし汲て雲の香　錦重

無季類部

宿置て佛参る人の案内かな　宇治 寥翁

毎日の空住む好り和歌の山　小雪

小築庵にて

秋や風夜を明かねきはつり明り　柏築

ほとゝきすゆくさらに音なし雲　春湖

稲の本一文葉子あり店先りて　築

箇の合羽の着ても袖には　湖

月入道をすゝみに付まる庭　鷲　築

暑さ長やうて　秋の　ほとゝ彩　湖

壽のおほあねらちを居せくうり　築

枕莚きそしくまれも古はなり　湖

ほしつめに声を立てゝき山刀　築

さはのてはれは花洋中　湖

續くは雲居に並へる飯支度　築

御手ふ神の供いやう祭り　湖

うり出しさまへ四五枚数はし　築

ますうらうらして春のうちしさ　湖

遠慮なく砂をあらする女たち　　桑
人にしれず茶謹請乃菁　　湘
このやまは光まき月の昇り場　　桑
八朔梅の紫にて出の古　　湘
切組は名古屋造りの小座建　、
雨の晴るゝ宿り張り逢ぬ　　桑
このみ捨りの毛虫に折節左右　　湘
後者のまゝの借着まゐる　　桑

急なりしあまり船の手拭作　　湘
角伐つんつん牛を追向　　桑
鯖寄る八日月の咲新春　　湘
男ならぬ君に尽して百恋ひ　　桑
死なれしまゝ絶えぬ人を恨みてや　　湘
須磨の浦に絶えぬ恋の憐　　桑
また青月の晴れやらぬ軒庵　　湘
折髪のうへり走る新麦　　桑

雪積る道の修業の寺参り　湖
年貢済して戻る船の可　菜
中南の山来て近付梢のさくら　湖
木地の炉縁に何そる羽箒　菜
尽す遠も寄し伝ふ乃壁の屋　湖
菊の盛き香んて静さ　菜

船寄に尺や小家の杜若　柏菜
稲の穂さす所か相良し粧　路平
舞楽終わ出来る手弾て拝かん　素湖
棟うけにようき石を何せ候　菜
月待ていつも秋部の晴椿ひ　平
大庭あれ板に水底の陸　湖

阿造る紙の誅のやしれ恋すて　粲

あらいらまく未だに香筆　平

孫つけと限もぬ宰の物哉　沾

雅疎入の読をさらす　粲

ぬくの星の赤は冬はら渡て宝　平

水仙折る畠河岸の舟　沾

隣て居て又赤家まり約出し迷　粲

痘瘡の子めきを思うやうくよき　平

純子好とたまくまゐる読ちり　沾

戸さしぬ比代に奴とも有志　粲

麦麦の打ちも包み野の廣さ　平

松ふきさや寺　脇乃　奥　沾

驚ら銀のもやりまて拭て純さまう　粲

取あして妻ふ野呂宮人形　沾

坊主衆の好みまさかね法上向　平

土用中てゐるまぬ雲平　粲

只彼は明て暮るゝを非風ら　湖

加茂の祭に遠出も後ても　平

手執の比翼に入あらし　梁

雑煮に出る呉張屋の人　湖

とをみ流と鮮雨紫の雲哉　平

乗鞍出る海と露つゆもむしろ　梁

宵闇は暫けて来き哀中月　湖

西面をちゝけ尽ゆる烟草火　平

うし彼行し扇売丁度王は道時　梁

何の事細か彼らし之深の庄　湖

ふいくら出物行するゝ部分まき　平

高麗を挑続す町の廣き　梁

句引きへ先まつ出れ任より　湖

清らく日和をき清し紀れし雲　平

富田藏書

ヒ1
7 603
2

明治二年